
幻想転生勘違い～歩くチートは今日も行く～

風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想転生勘違い〜歩くチートは今日も行く〜

【Nコード】

N2051U

【作者名】

凧

【あらすじ】

明らかにチートな主人公が、東方の世界で勘違いさせながら飄々と生きつつ、誰かと恋い焦がれるかもしれない物語。

プロローグ（前書き）

こんにちは、凧です。

ちょっと浮かんだので、ちまちま書いていきたいと思ひます。

ある意味息抜きの小説なので、更新はまぢまぢです。

プロローグ

「ごめんね」

さて、この状況はなんだろうか。

彼、木原マオが通り魔らしき人に刺されて、目を覚ましたら目の前に少女。

その上泣いて彼にしがみついている。

彼は思った。

理解できない

彼はオタクとまではいれないが、ゲーマーである。

このように神が泣いて、間違えて殺したみたいな展開もよくあった。

あと、ラノベも読むので、こんなのは日本人が米を食べるぐらいよくある状況だ。

しかし、目の前でそれが起きれば、誰しも理解できないだろう。

彼が少し冷静になって、泣いている少女に事情を聞くと、案の定である。

彼は間違えて殺されたと聞いても動揺しなかった。と、いうかできなかった。

理由は簡単。どうでもよかったからだ。

彼は顔がとても整っているのだが、如何せん目付きがよくなかった。

そのため、『木原魔王』と呼ばれていた。

本人はさほど気にしなかったが、見かねた学校の先生が保護者と相談して少しの間休ませていた。

そうしたら『偶々』外に出たときに『偶々』いた通り魔に『偶々』刺されて『偶々』多量出欠して『偶々』死に『偶々』それが目の前にいる神（幼女）の失態だという。
だから彼は思った。

アホか、と。

とりあえず幼女を立ち直らせるために頭を撫でて慰めるのだった。

「落ち着いたか」

「はい……見苦しいところをお見せしました」

「気にするな」

「いいえ、気にします！……あっ」

神がマオの手を握って叫ぶと、彼の体が光始めた。

「お、あ、なんだ、これ……」

彼が苦しそうに顔を歪めると、光が収まっていく。

神は顔が真っ青になって見つめている。

それもそのはず、彼は劇的な変化を遂げていた。

全身が日に焼けたように黒くなり、目付きは更に悪くなり、目の色は金になっていた。しかも、右目辺りには謎の赤いラインがグツグツグツに入っている。目付きはとある魔術の禁書目録の一方通行が睨んでいるときの目付きが平常時みたいになっている。

体つきは細いが筋肉がある所謂細マッチョだ。ただ、腹筋やら腕の筋肉やらは隆々としていて、何処の魔王だと思える体つきになっている。

服装も、腕に赤黒い籠手、足にも同じような履き物の足鎧。両腕には青い線でルーンが大量に描かれている。

鋼の錬金術士のスカーみたいなものだ。

上半身は裸で、体の左側にまた赤いラインがグツチャグチャに入っている。

その上に、千切れて短くなった赤いマントを羽織っている。

下もやや灰色がかったズボンで、裾が千切れている。そしてズボンにもルーンが描かれている。

見た目が明らかに何処かの魔王か隠しボスである。

そのため、神は驚きと同時に怯え、声が出せなくなっていた。

「おい、大丈夫か？」

「ひいいい!?!」

彼が声をかけると神は大層驚いた。

彼が自分の顔に何かについているのかと不思議に思うと、手に違和感を感じた。

何だと思って手を見ると、いつの間にか手鏡があった。

少し困惑したものの、手鏡で自分の顔を覗くと、そこに魔王がいた。

「……………は？」

驚いて神を見ると、とても申し訳なさそうにしている。

理由を聞けば、彼に間違えて力を授けてしまったという。

彼の両腕のルーンに備わっている『何でもできる』という力。

彼自身に備わっている『勘違いさせる程度の能力』。

因みに後者の能力を聞いた瞬間に、これからどうなるかを瞬時に把握した。

「えっと、貴方を東方の世界に転生させます」

「ああ、まあ、大体わかった。よろしく頼む」

彼がそう言うと、神は頷き手を翳す。

すると、彼の足下に幾つかの陣ができていた。

そして、彼の体が光始める。

「えっと、貴方の種族は一応人間ですので」

「わかった」

「では、次の人生をお楽しみください。本当にごめんなさい！」

神が謝ると同時に彼の姿が消えた。

これは、東方の世界で勘違いさせながら飄々と生きる一人の人間の物語である。

プロローグ（後書き）

プロローグは短いです。仕方ないね。

因みにこちらはとんでもないぐらいネタを含ませていきます。

ゴッドフィンガーや斬空天翔剣や滅びの爆裂疾風弾やその幻想をぶち殺すやサンダガーやイオナズンや北斗有情破顔拳や直死の魔眼やゴムゴムのピストルやザ・ワールドや最悪影分身までしちゃいます。

ネタが全部わかった貴方は素晴らしい。

甘味なる紅い月 ？（前書き）

心想記よりも長くなってしまったぁ……。
半分はネタでできてますのでよろしくです。

甘味なる紅い月 ？

「さて、ここはどこになるのか」

マオは今、幻想郷のどこかの森にいる。

どこか、というのはまだこの地に疎いためによくわからないというのが一点。

もう一つは、月明かりだけで、周りがよく見えないことが起因している。

「……そうだ」

彼はふと思い出したように自分の手を顔に翳した。

そう、今の彼には『何でもできる』のだ。
夜目を効かせることなど造作もなかった。

「さてと……随分と囲まれたなあ、おい……」

彼は一人愚痴りながら辺りを見渡す。

気付けば、熊の妖怪らしいものが多数いて、周りを囲んでいた。だが、彼は全く恐れていなかった。

理由は簡単だろう。何せ、負ける気がしないのだから。

「いいぜ……最高のパーティーの始まりだ！」

彼は腕を広げ、背を反らしながら高笑いし始めた。

見た目が見た目なため、とても怖い。

「グアアオウ！」

「グルアア!?!」

「斬!」

「ガツ!?!」

「空!」

「グガア!?!」

「天翔オオケエエエエエン!?!」

奥義を放ち、一匹を沈める。

剣を消したところで、漸く他の妖怪達が動き始めたが、既に遅かった。

「オラア!」

「!?!」

一匹の妖怪が『人形の何か』に殴られ、絶命した。
彼が使っているのは『スタンド』だ。

分かりやすい上、使いやすいと判断し、スタープラチナを使っている。

「オラオラオラオラオラオラオラ!」

「!?!?!?!?!?!?!?!」

近くにいた妖怪にラッシュをかけ、潰す。

残っている妖怪も残りわずかとなった。

彼はこの状況を楽しんでいた。

大好きなゲームや漫画、小説の技を使えるのだから。

しかし、彼は人間のため、後悔はあった。

それよりも、ゲームの世界にいることの喜びの方が大きかったが。

「いくぞ！」

スタンドを消し、自ら突進して殴り付ける。

妖怪は吹き飛んでいったが、違う妖怪が攻撃してきた。

だが、今の彼は修羅をも超える。

その攻撃を右腕で易々と受け止めると、思い切り蹴り上げた。

「ジェノサイドカッター！」

落ちてくる妖怪に更なる蹴りを放つ。

その妖怪は蹴られたところから切り裂かれ、絶命した。

残りは2匹か、と呟いた。

彼は広範囲に干渉不可能なセンサーを張ることを覚えた。

何時如何なる奇襲にも耐えるためにだ。

それに、もしあのスキマ妖怪に覗かれていてもすぐ気づくから、

と考えたのが一番の理由だ。

戦闘中にそんなことを考えるほど、彼は余裕だった。

「影分身の術！」

一気に十人ほどに分身する。

因みに彼らの戦闘力は彼と変わらない。

つまり、鬼が十人いるようなものだ。

普通に死ねる。

『いくぜ!』

何をするのかと聞かれれば、ただ殴るだけである。

だが、考えてみてほしい。

星熊勇儀並みの力を持った分身が十人突撃してくる恐怖を。

既に鈍い音が数十回。

分身を消すと、その場にいた妖怪は全滅していた。

「歯応えがないな……いや、あつたほうが怖いか」

彼はははつと笑いながらその場を後にした。

その後、さつきさつさと空を飛べばよかったと後悔するが。

「さて、ここは湖か。つてことはチルノや大妖精がいるのか。……
それよりも紅魔館に行きたいなあ」

彼は彼の湖に来ていた。

実は、彼は東方をあまりやったことがない。

友達から借りて一発目でルナティックを制覇できたのは恐らく彼
だけじゃないのだろうか？

そんな彼が初めてやった作品が、『東方紅魔郷』だった。

紅魔館のキャラは総じて好きだったため、実際に行きたいと思っ
ていたのだ。

「さて、行くところかな」

ふわりと飛びながら、紅魔館を目指す。

妖精の相手を軽くしながら進むと、いきなり氷が飛んできた。
まあ、彼は異常な身体能力だから問題なかったのだが。

「ちょっと！あたいの縄張りに許可なく入ってこないでよね！」

「（チルノか……）12+46は？」

「へ？じゅうにたすよんじゅう……」

彼はチルノになぞなぞを出し、その脇を悠々と通りすぎた。

大抵の妖精は頭が弱いので、なぞなぞで『相手』をするとすぐに
考え込むため、逃げるときなんかには最適である。

何故知っているかという点、東方の資料集を見たことがあったか
らだ。

「さてと……門が見えたな」

紅魔館の門が見えたため、地に降り立つ。

歩いて門に向かうと、美鈴がそこに立っていた。

近寄ると、案の定寝ていた。

「ZZZZ」

「……………」

肩を叩いても起きる気配が全く無い。彼はそのまま通っても構わなかったのだが、それだと美鈴が咲夜に怒られてしまうと思って、その場に立っていた。

20分ほど経つと、美鈴が目を覚ました。

「むにゃ……………」

「ん、起きたか」

「……………」

美鈴が彼を凝視する。
目の前には黒髪金眼の魔王。彼女は門番。
ならばどうするか？

排除！

「はあっ！」

「ん？」

美鈴の拳を必要最低限の動きで避け、不思議そうに見つめた。

しかし、彼は目付きがよろしくない。そのせいで、睨んでいるようにしか見えないのだ。

「何故こんなところに魔王が！」

「魔王？俺はマオなんだが……」

「黙れ！」

美鈴の攻撃を全て避け続ける。

彼は気付いていないが、ここで彼の『勘違いさせる程度の能力』が発動していた。

つまり、美鈴は紅魔館を魔王が襲撃してきたと『勘違い』しているのだ。

彼が自らの能力にきちんと気付いていれば、客として『勘違い』させることもできたはずなのだが。

能力を使いこなせてないために、勝手に作用してしまう。

「くそつくそつ！何で当たらない！」

「……………」

攻撃が一度も当たらないことに焦り始めた。

それもそうだろう、美鈴は弾幕勝負は弱いのだが、普通に戦う分にはレミリアと同等か、それ以上に戦えるのだ。

だが、そんな彼女の『通常戦闘での攻撃』が一度も通らないとなると、レミリアでせら危うい。

彼女はそれを恐れていた。

因みに攻撃が当たらないのも、攻撃した場所に彼がいると『勘違い』しているからだ。

「くそう……当たれ…当たってよお……」

彼女自身、圧倒的な力を見せられて恐怖している。

その上、自分の全力の攻撃が当たらない。

その2つの恐怖が重なって、涙が流れ始めた。

その瞬間、彼の目が見開かれた。

彼は一瞬にして美鈴の目の前に出現し、その肩を掴んだ。

「ひっ！」

「馬鹿っ……」

美鈴は怯えるが、彼は構わずにハンカチを生成した。

そのハンカチで涙を拭き取っていく。

「ふえ………？」

「っ……泣くな…頼むから……」

彼は悲しく顔を歪ませる。

その瞳は悲しげに揺れていて、とても何かを壊したりするような目には見えなかった。

美鈴はその目と行動に驚き、彼の目を見つめた。

彼は美鈴と目が合うと、とても心配そうに見つめた。

そこで、美鈴はやっと気付いた。

「………何で、私が起きるまで待っていたんですか？」

そう、何故彼が待っていたのか。

襲撃するなら別に美鈴が起きるのを待たないだろう。
むしろ無視する。

「……侵入したのがバレたら美鈴が咲夜に怒られるだろうが」

「え、あ……」

彼がそう言うと、美鈴は少し俯いた。

それは悲しかったからではなく、照れたからだ。

彼女はあまり名前で呼ばれない。

里の人も『門番さん』、レミリアでさえも『中国』や『門番』と呼ぶ。

だが、彼は目を見てしつかりと名前を呼んだ。しかも、彼女を心配した台詞も言いながら。

そして、マオは異性だ。

幻想郷には男がそんなに多くないため、そんなことを言われる機会がない。

そのため、免疫がなく、照れてしまったのだ。だが、彼はそんなことなど知らないため、更に顔を歪ませた。

美鈴が顔を上げてそれに気づき、慌てて弁明し始めた。

「えっと、ち、違うんですよ！べ、別に悲しくて俯いた訳では無くてですね！その、そう！免疫！免疫が無くてですね！ほら、この幻想郷には男の人が全然いませんし！言われ慣れてないから照れたというか、えへへ……あ、う、えと、ですから！」

「……………くっ」

「……………はえ？」

「ああ、はい、マオさん。まさか館をのつとるとか……なわけないですよ〜」

「ああ、ないな。ただ、顔を見せに来ただけだよ。こう見えても新参者だし」

彼は肩を竦めながらそう言った。

その行動も様になっていて、美鈴はまた見とれていた。

「で、レミリアの所まで案内して欲しいんだ。それなら美鈴も休めるだろうしな」

「あ……えと、ありがとうございます」

「いや、気にしなくていいよ」

彼は目を細めてにこりと笑う。

彼は目付きが悪いだけなので、目を細めて笑うとかなり格好いい。目を開けると残念なことになるが。

まあ、そんな笑みを向けられれば

「……………//」

照れるのも当然ではないだろうか。

「にしても広いな、紅魔館」

「まあ、咲夜さんが広くしてますからね」

「ああ、そうだったな」

美鈴の返答に彼が頷く。

彼は記憶力がいいため、東方の知識をかなり覚えている。
まあ、実際はどうなっているかはわからないのだが。

「さて、ここがお嬢様の部屋です」

「ああ、ありがとう。助かったよ」

「えへへ……」

彼が美鈴の頭を優しく撫でた。

マオは身長がとても高い。

幻想郷の人間の中で言うなら一番と言っても過言ではない。

何せ187あるのだから。

だから、彼が美鈴の頭を撫でると、兄妹のように見えるのだ。

因みに、二人が何故こんなにも仲がよくなってるかと言うと、単に気があったからだ。美鈴も苦労しているため、その話で盛り上がったのだ。

ともあれ、マオは美鈴と良い友好関係を築いていた。

「さ、入りましょう。失礼します」

「邪魔するぞ」

二人で中に入ると、小さな女の子とメイドがいた。

小さな女の子　レミリア・スカーレット　は椅子に座り、かなり偉そうにしていた。

見た瞬間彼は思った。

ああ、これはだめだ。

権力や自らのプライドを振り回してふんぞり返っている輩の典型的な例が目の前にいた。

これで偉そうに話してきて、悪態をつこうものなら知恵ある生命体（要は人間）に対して謝らせようと心に決めた。

「美鈴、そつちのは誰だ？ 私は侵入者を連れてこいという指示は出していない」

この時点で彼は既に呆れ始めていた。

まさかいきなり来たとはいえ客に対して挨拶すらしめない。

その上目の前で部下を叱りつける。

こいつは馬鹿かと彼は思った。

「えっと、彼がお嬢様にお会いしたいと申しましたので……」

「新しく幻想郷に来た人間。名はマオ。挨拶に来た。それだけだ」

彼は一刻も早く立ち去りたかったため、必要最低限の言葉を紡ぎ、その場から離れようとした。

だが、甘かった。

Q、目の前にいるのは誰か？

A、レミリア・スカーレット

「ふん。新参者のくせに随分とふざけた挨拶だな」

一瞬彼の額に青筋が見えた。

だが、すぐに引つ込めた。

しかし、彼の心は怒りで燃え上がっていた。

何故こんな餓鬼に上から見られなければならないのか。

直ぐ様薙ぎ倒したい。

貴様に朝日は拝ませない。そんなことを考えながらレミリアを見た。

そして

「ふははっ、お前は本当に人間か？なんと目付きの悪いやつだな」

彼の堪忍袋の緒が切れた。

「貴様のような餓鬼に言う言葉なぞこの世に存在してたまるか。付け上がるなよゴミが」

「……………なんだ、と……………」

彼が言い切った瞬間、彼から神々しい気のようなものが溢れ始めた。

それはレミリアでは遙か及ばない程の量、紫でさえも軽々と凌駕するほどの力だった。

それが目の前の男から溢れ出している。

レミリアはそれに恐怖した。『恐怖』してしまった。

それはレミリアにとって屈辱的なことであった。新参者がいきなり現れ、それに恐怖したのだから。

だから、レミリアは震える足に力を入れて、立ち上がる。

メイドである咲夜は既に座り込んでおり、恐怖しすぎて主に対する悪態をつかれても、動くことすらできなかった。

美鈴には被害がなかった。

その事実さえも腹立たしく、レミリアは振りきるように叫んだ。

「調子にのるなよ……人間風情が私になめた口を……！」

「だからよお、てめえは吸血鬼のプライドぶんまわして天狗になつてただけだろうが。権力振りかざしてそんなにたのしいか、ええ？ 少なくとも紫や永琳の方が丁重に扱ってくれるし、てめえより強えよ」

「ふざけるなああああああ……！！！！！！」

レミリアが彼に向かって突っ込んでいく。

手には作り出した『スピア・ザ・グングニル』を持っている。それを彼に向かって突き出した。

「全く……夜神月かよお前は……」

彼がそう言って『右手』を振りかぶる。

「そのふざけた幻想を……ぶち殺す！」

叫びながらグングニルを殴る。

すると、ガラスが割れたような音が鳴り響き、グングニルが破壊される。

レミリアが驚いて呆然としてみると、彼はレミリアの頭に手を乗せた。

「っ……」

「はあ……ったくよお……。あんま見下すなよ？こっぴうことだってあるんだよ」

ぼんぼんと頭を軽く叩くと、彼が扉へと向かう。

「レミリア、図書館行ってもいいか？」

彼が顔だけ振り返って聞いた。

美鈴は案内しようとするマオの近くに行くも、咲夜に気付いて手を貸して立たせていた。

レミリアはまだぼーっとしていたが、話しかけると慌てて返答してきた。

「え、ああ、ええ。好きにすればいいわ」

「そうか、助かる。美鈴、案内頼めるか？」

「あ、はい……」

マオと美鈴が軽く会話して、その部屋から出ていった。

レミリアは未だにぼーっとしていた。

頭を撫でられ、その感覚が父親に重なって、懐かしさを覚えたからだ。

咲夜も圧倒的な力量を見せつけられて、ぼーっとしていた。こ

うして、二人は彼が帰るまでぼーっとしていたのだった。

甘味なる紅い月 ? (後書き)

【使用ネタ】

機動武闘伝Gガンダム

『ゴッドガンダム』

技〔ゴッドフィンガー〕

能力：手が燃え輝く。

テイルズオブデイスティニー

『スタン・エルロン』

技〔フレイムシユート〕

能力：火炎弾を飛ばす。

テイルズオブデイスティニー

テイルズオブデイスティニー2

『スタン・エルロン』

『カイル・デュナミス』

技〔斬空天翔剣〕

能力：未来に託す永劫の剣

ジヨジヨの奇妙な冒険第三部

『空条承太郎』

技〔スタープラチナ〕

能力：オラオララッシュ

KOF

『ルガール・バーンシュタイン』

技〔ジエノサイドカッター〕

能力：対空技、初期は5割以上減った

NARUTO

『うずまきナルト他』

技〔影分身の術〕

能力：自分を増やす

とある魔術の禁書目録

『上条当麻』

技〔幻想殺し〕「イメージブレイカー」

能力：あらゆる異能の力を無力化する

甘味なる紅い月 ？（前書き）

一月空いてしまいました……申し訳ありません。
今回も、ネタが満載です。

真面目にネタを書いていると意外と普通に見えるものですね。

甘味なる紅い月 ？

レミリアたちとの一件を終え、マオと美鈴は図書館へ向かっていった。

因みに、何故紅魔館の事情を知っているのか等の質問は一切されていない。まあ、単純に何故知っているのかを聞く意味がないと思っっているからだ。

美鈴は目の前でハンカチ出されたり、主人の魔槍を殴っただけで消したりと謎の現象を数多く見ていたため、知っててもおかしくないですね〜と楽観的に考えていた。

その為、彼は転生したのを隠すために余計に嘘を吐かなくて済んでいるのだ。隠している理由は、幻想郷でもマオのようなイレギュラーはさすがに認めてくれないだろうと思っっているからだ。

「はい美鈴、飴」

「あ、ありがとうございます！」

道中、二人で飴を舐めたり世間話をしたりしながら歩いていた。

美鈴はこの『魔王』さんはいいい『魔王』なんだなと思っ込んでいる。

そもそも彼は『人間』なので、最初から認識を間違えているのだが。

だから、美鈴は名前前で呼んでくれて、尚且つ優しく接してくれるマオが普通に好きになっていた。まあ、恋愛感情ではないのだが。

そのため、美鈴はるるんとしながら歩いていた。

一方、彼は図書館に行つてパチュリーに挨拶をと思っっていたのだが、その前に咲夜に謝らないといけないのでは？と思っながら歩いていた。

少し威圧をかけてみたのだが、腰を抜かしてしまっていた。数少ない能力持ちの人間だし仲良くなりたくないな、と彼は思っていた。だが、咲夜はレミリアに敵意を向けられていたのに気付いて、あの人はお嬢様の命を狙っていると勘違いしているのだから、かなりすれ違っている二人だった。

ともあれ、マオと美鈴は図書館までやってきた。奥まで進み、パチユリーを探す。

「パチユリー様ー、いますかー？」

「あら美鈴。何かよ……………う……………」

パチユリーを呼びながら歩いていくと、椅子に座りながら本を読んでいたらしい。

こちらの方を見ると、ピシッと固まっていた。まあそつだろう。

パチユリーは『魔女』。

マオの風貌は『魔王』。そして両腕には大量のルーン。どこからどう見ても研究対象だ。

ただし、目付きがものすごい悪いため、パチュリーはとてつもない憶測をたてた。

こいつは違う次元の『魔王』なのではないか、と。

パチュリーが最近読んだ本に、次元さえも操って戦う魔王がいたと書いてあった。

そして、その魔王は目付きが悪く、肌が黒い、と間違はなく目の前にいる奴がその魔王だろう、と。

まあ、明らかに勘違いなのだが、彼の能力が能力であるため仕方がない。ここでの勘違いは、『マオを魔王だと思っている』こと。それから、『魔王は美人を誘拐する』ということ。最後に、『美鈴が捕まっている』ということ。

主に最後の勘違いがひどい。これは勘違いと言うよりは、妄想だろう。

まあ、仲良くなりすぎてマオと美鈴が手を繋いでるのが悪いのだが。

「……………その門番を放しなさい」

「「……………?」「」

マオと美鈴は二人仲良く見合わせ、首を傾げた。第三者から見れば、明らかに恋人に見える。

だが、パチュリーの妄想は止まらなかった。

「一体何を企んでるのよ。図書館の制圧？紅魔館の制圧？それとも幻想郷を支配するのかしら？」

「……………」

マオと美鈴がパチュリーの勘違いに気づき始め、クスクス笑い出した。

ただ、マオの笑い方が馬鹿にしたように見えたらしく、パチュリーが憤慨しはじめた。

「ふざけてるの？ いい加減にしないと……………ここで殺すわ」

そう言いながら、魔方陣を作り、マオに向けた。

マオはそれを見て少し焦り出した。

「お、おい。俺は別に馬鹿にしたわけじゃあ……………」

「黙りなさい」

「月符『サイレントセレナ』」

パチュリーがスペルを宣言し、魔法を放ってきた。

美鈴を助けるために全力で放っている。

そもそも捕まっているわけでもないのに、助ける必要もないのだが。

「面倒な……ATフィールド！」

両手つきだし、目の前にシールドをはって、弾幕を全て受け止める。

全て受けきると、パチュリーが新たなカードを構えていた。

「火符『アグニシャイン』」

パチュリーが更に魔法を放ってきた。

しかも、その魔法はゲームで見たものとは違い、大量の火の粉が此方に飛んできた。

「パ、パチュリー様！ それスペルじゃなくて普通の魔法じゃないですか！」

「美鈴、下がれ」

マオは美鈴を後ろに下がらせて、迎撃の姿勢をとった。

「ハイドロポンプ！」

マオはカメックスよろしく両腕から大量の水を放出して、火の粉を全て消した。

パチュリーは驚いていたが、すぐに新たな魔法を詠唱しはじめ。マオも対抗して、詠唱をしはじめた。なんでもできる力があっても、流石に詠唱は必要らしい。

ただし、詠唱が大掛かりなのは気のせいだろうか。

「水符『プリンセスウンディネ』」

「アクアリムス！」

パチュリーが魔法を放ち、水弾がマオを襲う。
しかし、マオは精霊であるアクアリムスを呼び出し、更なる詠唱を始めた。

「我が呼びかけに答えよ！ 静かなる意思、肅正の力に変える！
正義の心、我らに！」

「っ！ 精霊魔法！？」

マオの詠唱が終わるとフィールドが変わり、津波のような水がパチュリーを襲う。

しかし、パチュリーも魔女。転移魔法で難なく回避した。
まあ、かなり疲弊しているが。

「なんて力……固有結界まで作れるなんて……」

「……そろそろ止めないか？」

「そうですねパチュリー様。それに、私捕まってないですよ？」

美鈴がそう言うと、パチュリーが不思議そうな顔で美鈴を見た。
美鈴はマオに目を向け、マオも美鈴を見ながら困ったように笑った。

そこで、ようやくパチュリーが勘違いをしたことに気付いたらしく、顔を真っ赤にしながら俯いていた。

「む、むきゅ〜」

「やはりこの容姿だと勘違いされやすいな。……俺の能力のせいもありそうだが」

「あれ、マオさんの能力って何かこう、不思議能力を使うとかじゃないんですか？」

「いや、違う。俺の能力は『勘違いさせる程度の能力』だ」

美鈴がきよとんとしながらマオを見つめる。

マオは見つめられたから照れたのか、顔が赤くなっていた。

「んーとなあ、パチュリーは俺の事を魔王だって思い込んでた？ それを助長させたのが、俺の能力なわけだ」

「うーん……よくわかりません」

美鈴はちよつと困った顔をしながら手をもじもじしはじめた。

マオはそれを見て少し苦笑いをしながら手に小さな黒い石を生成し、美鈴に見せた。

「美鈴、これはなんだ？」

「……黒い石、ですよね？」

美鈴がよく分からないという感じで聞き返した瞬間、能力を始動させてみる。

そして、手を少し動かして、黒い石を振る。

「いや、これはゴキブリきゃあああああああ……！！！！！！」へ
ぐくっ！！

マオが黒光りするGの名前を出そうとした瞬間、美鈴の蹴りが顎にヒットした。

彼の肉体は一応人間なので、美鈴の蹴りを食らえば顎が砕かれかねない。

「め、美鈴！ あなた何して……ひいいい！？」

パチユリーが美鈴を注意しようとしたが、マオの手から吹き飛んだ黒い石を発見して、小さく叫んだ。

能力は黒い石自体にかかっていて、黒い石が黒光りするGに見えるという勘違いを引き起こしている。

彼が能力をきちんと扱えた瞬間だったが、当の本人はダウンしていたりする。

「ぐう……め、美鈴……」

「あわわわわ！ ご、ごめんなさい！ てつきり石が黒光りするGだと！」

「それが俺の能力ってわけなんだが……ああ、痛い……」

マオは顎を擦りながら、美鈴の手を借りて起き上がった。

床にあった黒い石を消して、不毛な騒動に終止符を打った。

「ふう……。さて、パチユリー」

「な、なによ……」

さっきの勘違いや、今の騒動で慌てたことなど、自分の行いが恥

ずかしすぎて顔が真っ赤になっている。

「本を読んでいてもいいか？」

「ええ、構わな「パチュリー、あの本の続き読んでー」……いけど、多分読めなくなるわよ」

「ああ、何となく把握した」

パチュリーがそう言うと、マオは苦笑いしながら本が読めなくなる理由になるであろう原因に目を向けた。

そこに立っていたのはレミリアの妹ことフランドール・スカーレット。

少々情緒不安定な部分があり、かなり好戦的である、という話をマオは友人から聞いていた。

まあ、その友人は「フランちゃんうふふ」とかわけのわからないことを言っていたが。

「あれ、お兄さんだあれ？」

フランがマオを見つめながら聞いた。

マオもフランを見つめるが、これといって危険な部分が見当たらず、友人の言っていた事は嘘だったのかと考えていた。

「俺は木原マオ。魔王ではなく、人間だ」

人間であることを強調して話していた。

まあ、勘違いされたくないからだろう。

「ふーん……マオって言うんだ。ねえ、マオ、私と遊んで！」

「ん、構わないけど、生憎ごっこ遊びは出来ないぞ?」

マオはスペルカード等を全く用意していないし、それほど知識も無いため、弾幕ごっこが出来ない。

それを聞いたフランが楽しそうに笑いながら提案した。

「なら、久しぶりにあれがやりたい!」

「何をだ?」

マオがそう聞くと、フランの笑顔がだんだん狂気に染まりはじめ、美鈴とパチュリーが焦り始めた。

そしてフランがこう言った。

「プロシヤ」

「全く洒落にならないな……」

マオはそう言いながら距離をとった。

目の前に見えるクレーターの数々は、フランのレーヴァティンに
よるものだ。

マオは底上げされた反射神経で全て避けていた。

「アハハ！ お兄さんすごいね！」

「ありがとうよつと。……吸血鬼の妹になら本気の力を出しても大
丈夫だよな」

マオは少し呟き、全力でフランに攻撃しようと思った。

ただ、最終的にはフランの狂気を取り去りたいなと考えていたり
する。

「いくぞ、フラン！ シャイニングフィンガアアア……！！！」

白く輝くその手をフランに向け、突進する。

フランは当然避けたが、シャイニングフィンガーが直撃した床は、
フランが作ったクレーターよりも大きなクレーターを作り出してい
た。

「アハハハハ！ 凄い凄い！」

「まだまだ序の口だろうか？ いくぞ！」

マオはフランに突進し、床を蹴って飛び上がる。

フランもレーヴァティンを構えてマオに突進する。

「南斗水鳥拳究極奥義、断己相殺拳！」

「わああっ!」

マオが放った衝撃波がフランを襲う。

何度も避けるが、床、本棚、壁など様々な所に当たり、反射してまた飛んでくるという状態になっていた。

「えい！」

フランはレーヴァティンを振り、衝撃波を全て薙ぎ払った。

だが、マオの姿を完全に見失い、慌てて探し始めた。

「ここだ、フラン！」

「え!?! わああ!」

マオは真つ正面から真つ直ぐ飛んできて、飛び蹴りをフランに当てた。

フランは吹き飛び、本棚に直撃した。

「むう、痛いよお兄さん！」

「コロシアイしようって言ったのだから……」

フランは抗議の声を上げつつも、楽しそうにしている。

霊夢や魔理沙と出会い、感情のコントロールが上手くなっているのは本当らしく、先程も、最初こそ狂気に飲まれていたものの、途中からは楽しく戦闘していた。

「まあ、楽しく戦うならもつと感情をコントロール出来るようにな

「うん！ じゃあ逝くよ、お兄さん！」

「なんか字が違っつて危な!？」

フランにマオが突っ込んだ瞬間、足下が抉れた。
殺す気満々である。

「仕方ないなあ……よつと」

片手で掴めるサイズの斧を生成して持ち、フランに突進した。

「貴様を屠る！ この俺の一撃！ クリティカルブレード!!!」

「くっくっ……えい!」

斧に力を溜めて、力任せに叩きつけるわかりやすい力技をフランに放つ。

フランも無理矢理レーヴァティンで弾き返した。

「どんどんいくぞ！ 叩きのめす!」

マオがフランに斧を叩きつける。

「くっくっ……」

「まだのめす！ さらにのめす!」

更に追撃で叩きつける。

フランは全て耐え続けている。

「それが！」

マオが斧を捨て、腕をクロスして飛び上がった。

フランは好機と見たものの、体勢を立て直そうと後ろに跳んだ。

「ファイナルプレイヤー！」

マオの体から弾幕のようなものがホーミングしてフランへ飛んでいく。

「このくらいの弾幕なんて！」

フランは余裕の表情で全て避けた。

マオは少し悔しそうに眉を顰めたが、捨てた斧を消して、フランの方を向いた。

「フラン、まだやるのか？」

「うん！」

「流石に疲れたんだが……」

「えー……」

フランは抗議の声を上げるが、当の本人は既にやる気が無くなっている。

フランも仕方なくレーヴァティンを消して、マオの背中に飛び付き、肩車の体勢をとらせた。

「ん？」

「じゃあ代わりに本読んで！」

「ん、いいぞ。美鈴もおいで。一緒に本読もう」

「あ、はい！」

マオは美鈴とフランと一緒に本を探して取り出し、近くの本棚に背を預けて三人で読み始めた。

その姿はとても微笑ましいものだった。

「図書館直してよ……」

「パチユリー様、頼まれた紅茶持ってきまし……な、なんですかこれ!？」

床についたクレーターについてはスルーだった。

甘味なる紅い月 ？（後書き）

【使用ネタ】

エヴァンゲリオン

『一杯いるため特定なし』

技〔ATフィールド〕

能力：マオの場合ただの高性能シールド

ポケットモンスター

『水タイプポケモン』

技〔ハイドロポンプ〕

能力：最初期では結構強かった水の技

ティルズオブディステイニー2

『リアラ』

『ハロルド』

技〔アクアリムス〕

能力：今回はリアラ式秘奥義

機動武闘伝Gガンダム

『シャイニングガンダム』

技〔シャイニングフィンガー〕

能力：手が光輝く

北斗の拳

『レイ』

技〔断己相殺拳〕

能力：南斗水鳥拳究極奥義

テイルズオブディスタインリー2

『ロニ・デュナミス』

技「クリティカルブレード」

能力：結構カッコいい

テイルズオブディスタインリー2

『ロニ・デュナミス』

技「ファイナルプレイヤー」

能力：使うと途中でコンボが途切れる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2051u/>

幻想転生勘違い～歩くチートは今日も行く～

2011年7月27日22時35分発行